

特別支援学級の指導の充実に向けて（3年次）

～実態調査と授業づくりの提案～

島根県教育センター

教育相談スタッフ特別支援教育セクション 共同研究

目次

I	はじめに	1
II	研究の目的	2
III	研究の計画	2
IV	今年度の取組	
1	取組の方向性	3
2	「授業実践ファイル」「授業づくりリーフレット」作成に向けての授業実践	4
(1)	授業実施にあたっての基本的な考え方	4
(2)	授業の実際と評価	5
(3)	授業実践から「授業づくりの工夫」を考える	18
(4)	授業実践から見えてきたこと	21
3	「授業実践ファイル」の実際	22
(1)	全体構成	22
(2)	実践例の全体構成と伝え方の工夫	23
4	「授業づくりリーフレット」の実際	
(1)	基本的な考え方	24
(2)	内容と伝え方の工夫	24
5	今年度のまとめ	26
V	成果物の活用	26
VI	おわりに	27
	【引用・参考文献】	28

【研究の概要】

特別支援学級の学習指導上の課題に対応した事例集の作成をめざして、平成 23 年度から始めた調査研究である。今年度は、2年間の取組から導き出した自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりで大切にしたい4つの観点に基づいた授業実践を行い、その実践をとおして、障がいの特性に応じた授業づくりについての考察を行った。そこで明らかにした自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりの工夫や特別支援学級の授業づくりで大切にしたいことについてまとめ、「授業実践ファイル」や「授業づくりリーフレット」の作成を行った。

【キーワード】

特別支援学級 自閉症・情緒障がい 自立活動 障がいの特性 授業づくり

特別支援学級の指導の充実に向けて（3年次）

～実態調査と授業づくりの提案～

島根県教育センター教育相談スタッフ

特別支援教育セクション共同研究

I はじめに

私たち特別支援教育セクションの研究は、特別支援学級の指導の充実に向けて取り組み始めてから3年目を迎える。以下に、2年間の研究の概要について述べていく。

1年次は、県内の特別支援学級担任にアンケート調査を実施し、分析・整理した。そこから、特別支援学級担任には通常の学級での指導経験が長い教員や、特別支援学級担任の経験が3年以下の教員が多いということが分かった。また、これまで教科の指導を行ってきた経験をもちながらも特別支援学級での教科の指導に難しさを感じている担任が6割以上であった。その理由として、アンケートの記述から、児童生徒の障がいの特性への理解がまだ十分ではないことが考えられた。そこで、障がいの特性に応じた教科の指導とはどのようなものであるかを明確にし、実践事例をとおして提案していくことが、特別支援学級の指導の充実につながるのではないかと考えた。

2年次は提案する実践事例について、対象とする障がい種と教科を絞って研究を進めていくことにした。障がい種については自閉症・情緒障がいとした。自閉症・情緒障がい特別支援学級の子どもたちは、行動の意図と周囲の理解とがずれ、誤解が生じやすい。子どもたちが示すそのような行動が、障がいの特性に起因するものであると理解することは、特別支援学級の担任経験が短い教員にとっては難しいと考えたためである。

教科については、算数科とした。算数科は指導内容や指導の系統性がはっきりしているため、どの学年にどのような内容を指導するかが分かりやすい。しかし、特別支援学級に異学年の子どもが在籍している場合、一単位時間に同時に異なる内容を展開しなければならなくなる。そのような学習展開に担任は難しさを感じているのではないかと考えた。

上記のことから、自閉症・情緒障がい特別支援学級の障がいの特性に応じた授業づくりについて明らかにしていくために、聞き取り調査や研究協力校での授業実践を行った。そこから得た情報や気づきを自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍する児童の障がいの特性や教育内容と関連させていった。そして、自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりにおいて大切にしたい観点を4つにまとめた。

表1 自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりで大切にしたい4つの観点

観点1	(小集団の中で)人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。
観点2	児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。
観点3	教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。
観点4	安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

また上記の4つの観点は自立活動と深く関連しており、自閉症・情緒障がい特別支援学級の教科の指導においても自立活動の視点を取り入れていくことが必要であることが分かった。

今年度は、これまでの研究の取組を受けて、自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業実践事例集を作成することに向けてスタートした。しかし、その構想を改めて確認したとき、事例集には

自閉症・情緒障がい特別支援学級での実践を紹介するために、その対象が限られた人になってしまうことが想定された。そもそも本研究は県内の全ての特別支援学級担任の声を聴くことから始めたものであり、その全てに研究の成果を返していくことが必要ではないかと考えた。

このような考えの下、自閉症・情緒障がい特別支援学級で行った授業実践は「授業実践ファイル」としてまとめ、紹介していくことにした。また、自閉症・情緒障がい特別支援学級での授業実践をとおして考えた特別支援学級の授業づくりで大切なことを「授業づくりリーフレット」としてまとめ、県内のすべての特別支援学級担任に伝え、広めていくこととした。

II 研究の目的

- ・県内の特別支援学級担任が感じている学習指導上の難しさを把握することでその課題を考え、教育センターとしてできる支援の方向性を明らかにする。
- ・特別支援学級の学習指導上の課題に対応した事例の提案を行い、特別支援学級担任の授業実践の手掛かりとする。

III 研究の計画

年次ごとの具体的な取組は以下のとおりである。

< 1年次 > [平成 23 年度]

アンケート調査を実施し、特別支援学級担任の学習指導上の課題を明らかにし、支援の方向性を考える。

- ・特別支援学級の現状について特別支援教育室(現：特別支援教育課)及び各教育事務所の特別支援教育担当指導主事に聞き取りを行う。
- ・回収したアンケートのデータ分析・整理を行い、県内の特別支援学級担任が感じている学習指導上の難しさについてまとめ、教育センターとしての支援の方向性を明らかにする。

< 2年次 > [平成 24 年度]

小学校自閉症・情緒障がい特別支援学級の算数科に必要な指導の観点を検討し、まとめる。

- ・自閉症・情緒障がい特別支援学級担任のアンケート調査結果を見直す。
- ・自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業見学を行う。
- ・自閉症・情緒障がい特別支援学級担任や特別支援学級担任経験のある管理職、指導主事に聞き取りを行う。
- ・研究協力校において授業を実施し、必要な指導の観点をまとめる。

< 3年次 > [平成 25 年度]

自閉症・情緒障がい特別支援学級の学習指導上の課題に対応する「授業実践ファイル」や、特別支援学級の授業の手掛かりとなるような「授業づくりリーフレット」を作成する。

- ・2年次の研究の課題について捉え直しを行う。
- ・研究協力校で自閉症・情緒障がい特別支援学級の算数科の授業実践を行い、考察する。
- ・「授業実践ファイル」や「授業づくりリーフレット」に必要な内容を検討し、作成する。

IV 今年度の取組

1 取組の方向性

前述したように、これまでの2年間の研究を受けて、今年度は特別支援学級の担任の授業実践の手掛かりとなるような「授業実践ファイル」「授業づくりリーフレット」という2つの成果物を作成することを目指して研究をスタートさせた。

「授業実践ファイル」で実践を紹介するに当たっては、より多くの担任に役立つようなものにしていきたいと考えた。そのためには、事例をそのまま紹介するのではなく、4つの観点を生かした授業をしていく際の授業づくりの工夫を明らかにし、それを事例に合わせて紹介していくこととした。そのような伝え方をすることで、授業実践は小学校算数科だが、算数科以外の授業で応用してもらったり、中学校特別支援学級担任にも参考にしてもらったりできるのではないかと考えた。また、それらの工夫と自立活動との関連を明らかにしていくことで、障がいの特性に応じた授業づくりでの自立活動の視点を取り入れることの大切さも伝えていけるようにしたい。

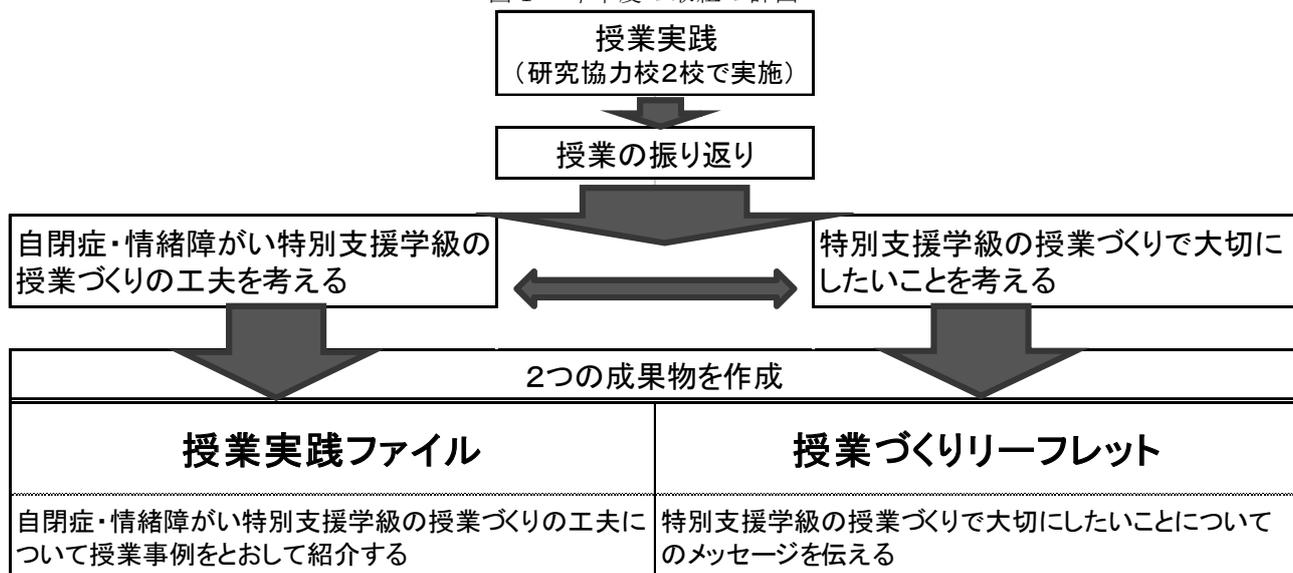
「授業づくりリーフレット」では、県内の特別支援学級担任に授業づくりで大切にしたいことについて伝えていくこととした。アンケート調査で明らかになったように県内には特別支援学級の担任経験が短い教員が多い。そのことも考慮した上で、伝える内容を精選していくことが必要である。通常の学級ではなく特別支援学級だからこそ、より大切にしていかなければならないことについて私たちが整理し、伝え方についても検討し、リーフレットという形にまとめていきたい。

これら2つの成果物の作成については、授業実践を手掛かりにして行っていく。

授業実践については研究協力校を2校に絞り、同じ学校の複数回の授業実践とすることとした。そうすることで、私たちの児童の実態の捉えがより確実なものとなり、授業についてより深く分析していけるのではないかと考えた。そして、授業実施については、指導主事が授業者となり担任と相談させてもらいながら授業を実施していくこととした。授業者という立場となることで、より主体的に授業づくりについて考えていくことができ、実感を伴いながら特別支援学級担任に伝えたいメッセージについて考えていけるのではないかと考えた。

今年度の取組の計画のイメージ図を以下に示す。

図1 今年度の取組の計画



2 「授業実践ファイル」「授業づくりリーフレット」作成に向けての授業実践

(1) 授業実施に当たっての基本的な考え方

①授業実施の目的

研究協力校で4つの観点に基づいた授業を実施し、その振り返りをしていくことで、自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりの工夫や特別支援学級の授業づくりで大切にしたいことについて明らかにする。

表2 自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりで大切にしたい4つの観点

観点1	(小集団の中で)人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。
観点2	児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。
観点3	教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。
観点4	安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

②研究協力校について

研究協力校については、昨年度の研究協力校の中から、異学年複数在籍の学級である2校について引き続き協力していただくことにした。そして、異学年複数在籍であっても、子どもたちがかわりをもちながら一緒に取り組める授業について模索していくこととした。

研究協力校の自閉症・情緒障がい特別支援学級の児童の様子について以下に示す。

表3 研究協力校の児童の様子

	A小学校A学級	B小学校B学級
児童の学年と人数	4年生児童1名(a児) 5年生児童1名(b児)	4年生児童1名(c児) 6年生児童2名(d児、e児)
教育課程	小学校学習指導要領に準ずる教育課程	

③授業実施の計画

研究協力校における1年間の取組を以下のように計画した。

表4 研究協力校での取組の計画

時期	研究協力校での活動内容
4月・5月	・協力内容についての説明
	・授業見学による児童観察や個別の指導計画に基づいた情報の共有
6月・7月	・授業実践1(事前、事後に担任との話し合いの時間を設定)
9月～12月	・授業実践2(事前、事後に担任との話し合いの時間を設定)
	・授業実践3(事前、事後に担任との話し合いの時間を設定)
	・3回の授業をとおしての担任との振り返り

このような計画のもと、研究協力校での授業を行っていくこととした。授業実施に際しては、

事前の授業見学で授業の進度や児童の様子を知る→授業構想についての協議→担任との協議→授業実施→授業についての振り返り→担任との振り返りというサイクルで行う。授業をビデオ

で撮影し分析を行ったり、事前の協議や振り返りについての時間を十分に設定したりすることで、4つの観点に基づいた授業づくりの工夫や特別支援学級の授業づくりで大切にしたいことについて探っていくこととした。

A学級での授業を実践No.1～3、B学級での授業を実践No.4～6とし、6つの授業それぞれについて授業設定の思い・授業の概要・授業の振り返り（4つの観点から）の3点でまとめたものを紹介していく。

(2) 授業の実際と評価

以下に6つの授業の題材名と授業構想のポイントを示す。

表5 授業の題材名と授業構想のポイント

No.	題材名	授業構想のポイント(観点)
1	いろいろな形であらわしてみよう [体積][図形]	①学習課題の達成感を感じ、自信がもてるように導入や言葉かけを工夫する(観点4) ②児童同士がかかわり合えるように、好きな活動を取り入れる(観点1) ③言葉や活動をイメージできるような教材・教具を用意する(観点2)
2	正方形を切り取って、 さいころの形(立方体)を作ろう [約数と倍数][整数の除法]	①二人の児童が安心して授業に参加できるための支援を考える(観点4) ②二人で一緒に学習できる場面を取り入れる(観点1) ③学んだことから学習につなげていけるような活動を考える(観点3)
3	折れ線グラフであらわそう [伴って変わる二つの数量の関係]	①ねらいを焦点化する(観点2) ②課題を意識し続けられるような提示の仕方を工夫する(観点4) ③児童が好きなことを取り入れ、実感したことを形にする(観点3)
4	分数1/8ゲームをしよう [分数][分数の計算]	①分数の概念の基礎につながる学習内容を考える(観点3) ②実感を伴って単位分数の意味をイメージできる教材・教具とその活動を考える(観点2) ③友だちと一緒に学ぶ楽しさを味わえる活動を考える(観点1)
5	比べてみよう！どちらがお得？ [単位量当たりの大きさ][整数の除法]	①学んだことを生活とつなげることができる学習内容を考える(観点3) ②異学年で一緒にできる学習を考える(観点1) ③“単位量で比べる”や“割り算”のイメージ化を図るための方法を考える(観点2)
6	クイズグランプリin○○！ “モノの位置を表してみんなで高得点”！！ [ものの位置の表し方][対称な図形]	①3人で一緒にできる活動を考える(観点1) ②主体的に活動に取り組める教材・教具を考える(観点4) ③安定した気持ちで楽しんで取り組める活動を考える(観点4)

次に、それぞれの授業実践の具体について述べていく。

<実践 No. 1> いろいろな形であらわしてみよう

① 授業設定の思い

学習課題の達成感を感じ、自信がもてるように導入や言葉かけを工夫する（観点4）

児童は友だちと自分を比較し、友だちはできるのに自分はできないなどと自己肯定感を下げたり、できない自分にいら立ったりするなど感情をコントロールすることが難しい。自分の気持ちに授業者と一緒に向き合いながらも自分なりに試行錯誤しながら考え、「自分もけっこうやれる」と感じるなど、児童に達成感や自信をもたせられるように言葉かけや導入などの環境を工夫し、実践する。

児童同士がかかわり合えるように、好きな活動を取り入れる（観点1）

工作や物の操作など、児童が好きな活動を取り入れることによって、児童の気持ちに余裕ができるのではないかと考えた。気持ちに余裕ができれば周囲へと視線が向き、授業者や友だちと関わる姿が表れるのではないかと考え、物を操作する場面を設定した。

言葉や活動をイメージできるような教材・教具を用意する（観点2）

b児には「体積」を量として捉えてほしいと考え、立方体を箱や水槽に詰める活動を設定した。a児にはこれまで平面を組み合わせて形を合成する経験がある。しかし「立方体」や「高さのある形」という言葉は聞き慣れていないと思われる。そこで、具体物を使用することで「立方体」や「高さのある形」「体積」という言葉がイメージでき、学習課題に意欲的に取り組める教材・教具を用意した。

② 授業の概要

図2 授業の概要No.1

<題材名> いろいろな形であらわしてみよう	
<算数科のねらい> 4年 a 児：算数的活動をとおして、高さのあるいろいろな形を作ることができる。〔図形〕 5年 b 児：算数的活動をとおして、具体物を使って体積を表したり、計算して体積を求めたりすることができる。〔量と測定〕	
<自立活動のねらい> ・自分のすることに見通しをもち、安心して学習に取り組むことができる。〔心理的な安定（1）〕 ・分からないときや困ったときに教師や友だちに援助を求めることができる。〔人間関係の形成（1）（4）〕	
<展開>	
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 はじめのあいさつをする。	・2名の様子に合わせてながらも、時間になったら始める。
2 本時の予定確認をする。	・見通しがもてるように、文字と図を使った予定表を示す。
3 形に関するクイズをする。 「何の形かな？」	・教師が作成した形を写真で示す。 ・児童が答えたものを認め、可能であればその理由を聞く。
4 本日のミッションを知る。 a 児 高さのあるいろいろな形を作ろう。	・自分の活動と友だちの活動が分かるように、それぞれの活動を言葉で示したのち、掲示する。 ・見本を示すことで、高さのある形をイメージできるようにする。 ・同じものを作ればいいという安心感をもたせる。
b 児 体積をあらわそう。	・「入れる、詰める」などの動きを一緒にすることで、量を感じやすくする。 ・具体物を使うことで視覚的に体積をイメージできるようにする ・児童から援助依頼がでるまで、できるだけ待つ。
5 振り返りをする。	・児童の様子に合わせてミッションの結果について聞いたり、教師から見た姿を話したりして、児童の気づきや工夫を認める。
6 おわりのあいさつをする。	

③ 授業の振り返り

視点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。

2名とも工作が好きのため、立方体や平面図形を組み合わせるなどの活動を取り入れることで「何か面白いことがありそうだ」と授業への心構えができていたように思う。そのため授業者の言葉にも気持ちを向けて聞いていた。授業者がa児に課題を提示しながら「高さ」を強調すると、b児がa児に声をかけた。そして「高さってわかる?(手で示しながら)高いと思う?低いと思う?」と高さについての説明をはじめた。そこで授業者はb児が説明をする場面を見守った。その結果、b児はa児に知っていることを教えたという満足感と自信をもった。物を操作する、作るという児童の興味のある活動、得意な活動だったからこそ、知っていることは教えてあげたいという気持ちになったのではないかと思う。また複数在籍であったからこそ、友だちに教えるという場面ができた。授業者と1対1の授業であったならば、授業者が教えるスタイルが強くなり、友だちに説明したり確認したりする場面はほとんど生まれなかったであろう。授業者も授業を進めることを優先せず待ったことによって、児童同士のやりとりが生まれたと思う。

互いの姿を自然と意識でき、必要に応じて児童に任せたり見守ったりする場面を作るなど、授業者の言葉かけや任せる姿勢も重要な支援の一つであると実感した。

視点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。

a児には厚紙で作ったいろいろな三角形と四角形を、b児には一辺が10cmの長さの立方体をはじめ、いろいろな大きさのものを用意した。a児は操作はしたものの「高さのある形」を念頭において操作してはいなかった。b児は水槽に立方体を詰めるという操作はしたが、その操作が「体積」とどう関連しているのかは分かっていなかった。操作することは児童が考えることを助けることになると思い教材を用意した。しかし、教材は「高さのある形」「体積」の意味をイメージすることにはつながらなかった。児童がしっかりと「考える」ためには、ねらいや操作の量、教材を絞る必要があった。例えば「体積」であれば一辺が10cmの立方体の中に一辺が1cmの立方体を詰めていくなど、もっとシンプルにする必要があった。あれも教えたい、これも分かれると算数が楽しくなるのではないかという授業者の思いが強く、手立てが先行した。児童にとっての分かりやすさにつながるためには、ねらいも教材・教具もシンプルにする必要があった。

視点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

導入では和やかな雰囲気を作りたいと思い、教材として使用する立方体を使ったクイズを行った。クイズが好きな2名は自分から手をあげ発言していた。導入で自分の思ったことを発言し聞きあったり、授業者がその発想を認めたりしているうちに、児童の表情が柔らかくなっていった。

机の配置などの環境はできる限り日常と変わらないようにした。その結果、互いの活動の姿を見たり関心をもったりしたが、途中からb児は友だちと自分を比較し「友だちは簡単に課題をやっている。自分は難しくてできない。」と、モチベーションを下げってしまった。このようなときに、なぜb児は上手くいっていないと思ったのか、またそのことを言葉にしたのはなぜかなどと、児童の思いを汲みとる姿勢が必要であった。そうすればもっとb児の頑張りを認める言葉かけをしたり、操作しやすい教材を工夫したり、ねらいを達成可能なものにその場で変更したりして、b児のモチベーションを上げる働きかけができたかもしれない。

認められ自分の思いが届くと、児童は安心して余裕をもって活動できる。児童のプライドも尊重しつつ、児童が安心できる環境をいかにしてつくり、維持するかを考えることが必要である。

<実践No. 2> 正方形を切り取って、さいころの形（立方体）を作ろう

①授業設定の思い

二人の児童が安心して授業に参加できるための支援を考える（観点4）

在籍児童二人の関係は、まだ一定の距離を置いておくことが必要な段階であると思われる。特に、「できた、できない」「わかる、わからない」を他者との比較の中で敏感に感じ取ってしまう状況のb児がいるので、情緒の安定を図っていくことが、最優先となる。授業者との人間関係をとっていく上でも、b児が安心感や必要感、目的意識をもてるように導入部分を大切に進めていきたい。また、授業者は二人の児童のつなぎ役をしながら安心して学習に参加し、活動に取り組めるように学習時間全体をとおして支援していく。

二人で一緒に学習できる場面を取り入れる（観点1）

4年生と5年生が在籍する学級で、同じ内容について一緒に考えたり意見交換したりすることとおして、お互いのよさや一緒に学習する楽しさを感じ取れるような活動（クイズ「これは何かな?」「さいころの形についてリサーチする」）を意図的に設定した。

学んだことから学習につなげて考えていけるような活動を考える（観点3）

4年生の学習内容「2位数などによる除法」と5年生の既習事項「最大公約数」について、今回の学習につなげて捉えてほしいと考えた。そこで、二人にとっては既に学習場面で見慣れたさいころの形を取り入れ、1枚の方眼紙から4年生は一辺の長さを求め出すのに割り算を活用し、5年生は縦横二辺の数字をもとに最大公約数を活用して一辺の長さを求め、それぞれが立方体をつくるという学習場面を設定した。

② 授業の概要

図3 授業の概要No.2

<題材名> 正方形を切り取って、さいころの形(立方体)を作ろう	
<算数科のねらい> 4年a児：具体的な場面で除法を活用したり、場面から立式をしたりする。[数と計算] 5年b児：具体的な場面をとおして最大公約数が使われる場面を知る。[数と計算]	
<自立活動のねらい> ・自分のすることに見通しをもち、安心して学習に取り組むことができる。[心理的な安定(1)] ・分からないときや困ったときに教師や友だちに援助を求めることができる。[人間関係の形成(1)(4)] ・具体物を操作する活動をとおして、自分の考えをもったり友だちの活動に関心をもったりする。 [人間関係の形成(3) コミュニケーション(5)]	
<展開>	
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 今日の学習内容と流れを知る。	・2人の様子に合わせながらも、同時にできない場合は、個々に対応してそれぞれで号令をかける。
2 クイズ 「これは何かな?」	・文字と図を使った予定表を示し、見通しがもてるようにする。 ・活動はリラックスした中で行う。回答が難しい場合を想定し、1つの題材について2段階の写真映像を用意しておく。
3 本日のミッション (1)説明を聞く。「1枚の方眼紙から1つのさいころの形(立方体)を作ろう。」 ◇条件1：1番大きいさいころ。 ◇条件2：方眼紙を全部使う。	・活動の内容が伝わるように、具体的に用意した方眼紙を見せながら視覚的に提示する。 ・児童が考えている姿や自分から取り組もうとする姿、援助依頼が出せたこと等、具体的な場面を捉えその都度褒め、認める。
(2)「さいころの形の秘密をリサーチしよう。」 ①さいころの面の形を考える。 ②さいころの面の数を考える。	・共通する内容(さいころの面の数、さいころの面の形)については、二人で一緒に確認する。具体的に考えられるように、さいころを準備し、必要に応じて、提示し、思考につなげる。 ・困ったときは、声をかけたり、目線を送ったりすればよいことを具体的に伝え、安心して取り組めるようにする。
(3)作ろう。	・a、b児の方眼紙は、複数枚準備しておく。 ・それぞれの活動と割り算の筆算(a児)、最大公約数(b児)を丁寧に意味付けする。
4 振り返りをする。	・出来上がったさいころを見せ合う。さいころが完成しなかった場合については、教師が、取り組んだ過程を他者へ伝え、お互いの頑張りが伝わるようにする。
5 おわりのあいさつをする。	・片づけをしてから、終わりの挨拶をする。

③授業の振り返り

観点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。

展開3で、同じ課題を一緒に考えたり、意見交換したりしながら、お互いのよさや一緒に学習する楽しさを感じ取れることを願って、さいころの面の形についてリサーチする活動を設定した。実際の授業場面では、次の学習展開に進まなければならないという授業者の思いが先行してしまい、b児がa児へ主体的にかかわりを求めて発した言葉に全く気付いていなかった。ビデオで確認すると、b児は、「立方体ってわかる？」とa児の方を向いて主体的に働きかけ、首を振るa児を見て、「(aちゃん)わからんって。」と授業者に伝えていた。しかし、このことに反応してもらえなかったb児は、その後、活動への意欲を下げている。授業者の思いと児童の思いのずれが生じ、b児のモチベーションを下げさせてしまった場面であった。自立活動のねらいに対応できる場面であったにもかかわらず、つなげられなかった。場を設定するだけでは、子ども同士のやりとりにはつながらない。主体的に発した子どもの言葉を拾い、つなげようという意識をもって関わる教師の役割がとても重要であると考えられる。

観点3 教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。

展開3で、4年生の学習内容「割り算」と5年生の既習事項「最大公約数」を活かして、1枚の方眼紙から正方形6枚を切り取り、さいころを作ってほしいと考え、そのことを学習活動とした。製作することは好きであるという実態はあったが、目的意識や何を求められているのかが伝わっていない上に、すぐ作る活動に入れるのではなく、リサーチという製作に入る前の課題も設定され、特にb児にとっては、設定した算数科のねらいにつながる活動そのものに至らなかった。「リサーチってめんどくさい。」とb児が言ったことは、早く製作にとりかかりたい気持ちの表れだったと考える。ねらいに迫るために段階を追って指導しようとする教師の意図と、早くさいころを作りたいというb児の思いがずれていた。「今まで学習した最大公約数を使って、1枚の紙からさいころを作るよ。」と発問し、教師の意図(学習のねらい)と学習活動のずれがないように提示し、すぐにさいころを製作する活動に入っていれば、学習のねらいに迫っていったのかもしれない。学習場面を設定するだけでなく、その場にどのような意図があるのか、教師の学習のねらいを児童にわかるように、シンプルに届けることが必要であると考えられる。

観点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

展開3でさいころの面の数を6面と確認した後で、面の形についても調べていく場面で、主体的に「正方形。」と答えたb児に対して、a児へ分かりやすく説明を促すよう働きかけた。しかし、b児は「やだ。」と返事をした。b児にとっては、さいころの形を作るという必要感や目的意識が弱い上に、モチベーションが下がっている状態であることを、しっかりと受け止めなければならなかったと考える。b児の表面的な行動に反応してしまっていたことや、b児の気持ちにより添えないままa児に関わったことで、b児の気持ちは途切れてしまった。授業者の何気ない言動が児童への刺激となって、過敏に反応させてしまう事がある。児童が安定した気持ちで学習に取り組むためには、授業者は、児童の言動の奥にある思いまでしっかりと目を向けられることが重要であると考えられる。「やだ。」と表現した言葉の奥の思いを瞬時にキャッチし、「質問の意味が、よく伝わらなくて、いやだった？」あるいは、「正方形ってどんな形なのって聞かれてもどう答えていいかわからなかったね。」と授業者が発した言葉を振り返っていれば、b児の気持ちは途切れなかったかもしれない。授業者自身が環境であるという意識をもつことが大切である。そして、気持ちを言葉で表現することが難しいという児童の特性を理解して、児童の思いを瞬時に汲み取り、支援していくことの難しさを改めて感じた。

<実践 No. 3> 折れ線グラフであらわそう

① 授業設定の思い

ねらいを焦点化する（観点2）

1学期の授業者との算数の授業では、児童なりに考え試行錯誤しながら取り組んでいた。a児はその日の取組を何らかの形で表すことができ達成感を感じたと思われる。一方でb児には、「体積をあらわす」というねらいの意図が伝わらなかった。さらに体積を計算で表そうとしたが答えにたどりつかず、机上に伏せた状態で授業が終了したことから、達成感を感じず、不本意な思いを残して終了したのではないかと思われる。それは授業者がねらいを絞っていなかったため、児童にとってはねらいをどう解釈したらよいか曖昧になり、授業者の意図とは異なる活動に取り組む結果になったと思われる。「何のために、授業で何をすべきか」を明確に児童に示すことで、児童に達成感をもたせ、自信をつけたいと思い、ねらいを焦点化することにした。

課題を意識し続けられるような提示の仕方を工夫する（観点4）

学習の課題(本日のテーマ)を書き込んだ予定表を提示し掲示することで、どのような学習をするのかという見通しをもち続けられる。また、授業中でも予定表を見ることで、展開のどこの部分をしているのか、何をするのかを確認でき、安心感につながると考え、黒板に掲示することにした。

児童が好きなことを取り入れ、実感したことを形にする（観点3）

児童は、表やグラフを見た経験があるかもしれないが「グラフだ」と日常生活で意識してはいない。児童が自分の心拍数を測り、伴ってかわる数量をグラフに表すことによって、折れ線グラフとは何かという意味を知ったりグラフの基礎的な概念を育んだりできるのではないかと考え、この題材を設定した。また、この授業をきっかけに「他教科の教科書に載っている」「テレビで見た」など「自分が知っているもの」「学んだもの」と気付いてほしいと思う。

② 授業の概要

図4 授業の概要No.3

<題材名> 折れ線グラフであらわそう	
<算数科のねらい> 4年a児：運動前後の心拍数を表に記入したり、グラフ上に点で示したりすることができる。[数量関係] 5年b児：運動前後の心拍数を表に記入したり、その推移を折れ線グラフで表したりすることができる。[数量関係]	
<自立活動のねらい> ・活動に見通しをもって学習に取り組むことができる。[心理的な安定(1)(2)] ・分からないときや困ったときに、教師や友だちに援助を求めたり気持ちを伝えたりすることができる。 [人間関係の形成(1)(4)]	
<展開>	
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 はじめのあいさつをする。	・休憩や気分転換がさらに必要なときは、時間や場所、次にすることを一緒に確認してから必要な時間を確保する。
2 今日の学習の流れの確認をする。	・学習の流れに見通しがもてるように、文字と図等を使った予定表を示す。
3 今日の目標の確認をする。	・「折れ線グラフ」という言葉とおおまかなイメージが結び付くように、例としていくつかの折れ線グラフを示す。
4 心拍数とは何かを知る。	・児童のつぶやきや発言を板書したり、「バクバク」をどの部位で感じるかを個々に確かめたりしながら話を進める。
5 今の心拍数を予想する。	・「心拍数」や「測り方」が分かるように、実演したり、写真を示したりする。
6 運動後の心拍数を予想する。	・予想させることで、次の活動への意欲をもたせる。
7 止まらずに動き続ける。	・やり方が分かるように、状況によっては教師が手本を示す。
「予想が当たっているかどうか確認しよう！」 ・3分間の運動タイム!	・残り時間を児童に提示したり、動いている児童の姿をその都度認めたり実況中継したりしながら、動くことへのモチベーションを保てるようにする。
8 心拍数を表に記入する。	・測る際には静かに、呼吸を整えることも伝え、「動と静」のメリハリがつけられるようにする。
9 グラフに記入する。「折れ線グラフを描こう。」	・児童が選べるように、2パターンのグラフ用紙を提示する。
a児：点を打つ。b児：点を打ち、線で結ぶ。	・「折れ線グラフ」そのものの存在を知ったり、関心をもったりすることができるように、どのように数字(数値)が変化したかを聞き取る。
10 おわりのあいさつをする。(振り返りも)	

③ 授業の振り返り

視点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。

児童の好きな運動を取り入れたことで、一緒に活動する姿が見られた。運動中に一度、ぶつかることがあったが、怒ったり機嫌を損ねたりすることなく、互いに体が触れないように、進路をふさがないようにして、互いを意識しながら運動を続行した。

座っての学習スタイルだけではなく、動く場面も取り入れることで児童は張り切って活動していた。張り切っている姿を授業者が認め、その都度肯定的な言葉かけをすることで、児童は自信をもち、授業へのモチベーションを高めていた。そのためには、まずは児童自身が自分を認め自信をもつことが必要であり、それを実感できることが日常的に必要なのだと考える。

視点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。

学習課題の達成に向けてスモールステップ表を作成し、どのように児童に課題を提示するかを考えてねらいを絞った。その結果、児童は見通しをもって取り組んだ。また授業者もやるべきこと(必要な支援)が明確になった。またねらいを児童が達成できるように、記入用のグラフ、記録表、心拍数を測るときの写真、学習の流れや諸注意の文字など活動ごとに教材を用意した。これらを言葉と共に提示することで、児童に分かる活動(分かる指示)となった。児童が実際に教材を使用している姿からも、授業者の発問や説明が教材を介して児童に伝わっていることを確認できた。児童が達成感を感じられるように、児童にとって必要なものを用意し、必要な形で提示すること、また、そうなるようにねらいや教材を突き詰めて精選することが大切である。

視点3 教科で学んだことを生活と結びつけて考えたり、使ったりする学習場面を設定する。

運動後の心拍数を血圧計で測り、その数値を表やグラフに表したことで、児童は自分の活動の結果を視覚的に捉えることができ、そのことが授業に取り組み続ける意欲を引き出したのではないかと思う。また、座標と座標とを線で結ぶことによって自分の心拍数の変化が折れ線グラフで表されており、より明確に活動とグラフの結びつきを自覚できたのではないかと思う。「わかる」ことによって、そのことを生活につなげていくこともできると思う。今後、児童が他の教科の時間に「あ、グラフだ。」と思ったり気づいたりしたときこそ、生活に結びつけていることになるのではないかと思う。

視点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

授業のはじめに学習の流れとねらいを示すことで、児童は見通しをもち、落ち着いて取り組んだ。分からないことはその都度授業者に聞くことで、不安や分からないことを解決し、安心した様子だった。教材・教具もできるだけ絞り、シンプルな物、シンプルな環境を設定した。

授業者と児童のやりとりについても、児童が授業者に受けとめられているという安心できる応答を心がけた。その結果「〇〇先生～、していいですか？」など授業者に確認を求めたり本人なりの援助要求が現れたりした。また、児童の言葉を言葉どおりに解釈するのではなく、その言葉で言いたいことは何かと児童の気持ちを推し測りながら会話をすることを心がけた。その都度、子どもの思いを読み取りながら会話をすることが必要であり、その思いを読み違えたときは素直にその旨を伝え、改めて思いを確認することが大切である。教材・教具は事前に準備できる物もあるが、言葉やかかわりはそうではなくその瞬間にその状況にあわせて表すものである。授業者も環境の一つであることを自覚し、児童の思いを汲みとりながら授業することの重要性を感じた。

<実践例 No. 4> 分数 1/8 ゲームをしよう

① 授業設定の思い

分数の概念の基盤につながる学習内容を考える（観点3）

対象児童は、分数の計算の仕方（スキル）を覚え、ドリルやプリント学習には一人で取り組めるものの、分数の意味については、実感を伴って、さらに理解を深める必要があると思われる。分数の指導は、第3学年から本格的に始まるが、その基盤となるのは、第2学年で取り扱う素地的な学習活動や「等しく分ける」等の生活経験である。生活の中で経験してきた「折る」「分ける」といったことが「分数」の学習とつながっていることに気付いてほしいと考え、「分数 1/8 ゲームをしよう」を設定した。

実感を伴って単位分数の意味をイメージできる教材・教具とその活動を考える（観点2）

「元になる単位量を幾つ分に分けた1つ分」という単位分数の意味を理解させるために、身近な素材で大きさや形が異なるものを準備し、いずれも「1/8の大きさ（長さ）を作る」という算数的活動を設定した。

友だちと一緒に学ぶ楽しさを味わえる活動を考える（観点1）

友だちのやり方を見て学んだり、友だちと話し合っって学習を進めたりする活動をとおして、友だちと一緒に学ぶ楽しさを感じてほしいと考え、同じ学習課題を設定し、クイズやゲームをとおして学習を進めることにした。ゲームを進める中で、「友だちと相談して決める」場面を設定し、児童の話し合いを見守りながら、児童同士をつなぐかわりを工夫していきたいと考えた。

② 授業の概要

図5 授業の概要No.4

<題材名>分数 1/8ゲームをしよう	
<算数科のねらい> 4年c児：算数的活動をとおして、分数の意味（等分にしてできる部分の大きさ）とその表し方を理解し、加法・減法の計算ができる。[数と計算] 6年d児：算数的活動をとおして、仮分数、真分数、帯分数の表し方とその量について、実感を伴って理解する。[数と計算] 6年e児：算数的活動をとおして、分数の意味、いろいろな表し方、計算について、ことばや、式や図に表して説明することができる。[数と計算]	
<自立活動のねらい> 4年c児：少人数集団で、自分の気持ちを友だちに伝えようとする。[人間関係の形成（2）コミュニケーション（2）] 6年d児：少人数集団で、友だちの思いや考えを聞こうとする。[人間関係の形成（2）コミュニケーション（2）] 6年e児：少人数集団で、相手を意識して分かりやすく伝えようとする。[コミュニケーション（5）]	
<展開>	
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 今日の学習内容と流れを知る。 「おもしろ分数教室」 ① 1/8クイズ ② 1/8ゲーム ③ 振り返り 2 1/8クイズに挑戦する。 1/8の大きさ（長さ）を作る ① 直線（モール） ② 円形（紙皿） ③ 長方形（A4用紙） 3 1/8ゲームを楽しもう。 ① ゲームの準備をする。 「1オレンジを8等分する」 ② じゃんけんに勝って1/8オレンジをゲットしよう。 ③ チャンスカードで運試しをしよう。 ×2 ÷2 +3/8 -2/8 チャンスカードを引く順番を友だちと相談して決める 最後の人が引いてから、一者にチャンスカード見る ④ 結果発表をしよう。 トータルの枚数を調べて、友だちに伝える	・学習課題、予定を掲示し、3人で教え合っってよいことを伝えておく。 ・折りに目に印を付けるよう促し、いくつに分けたか実際に数えたり、もとの大きさと比べたりできるようにする。 ・折る度に、元の大きさ（長さ）の1/2 ⇒ 1/4 ⇒ 1/8になっていることを見て分かりやすいように板書する。 ・準備の手順やゲームのやり方が分かりやすいように、絵と文字で時系列にそって説明する。 ・カードのやり取りや枚数調べの際には、元版にカードを置くように声がけて、もとの大きさ1と1/8との関係を見て確かめられるようにする。 ●c児：1/8のいくつ分であるか、1より大きいかわ小さいかわ問いか、ことばや記号で表現させる。 ●d児：仮分数は他の表し方がないか問いか、帯分数で表すとどうなるか考えさせる。 ●e児：どのように計算をしたのか問いか、分数の計算式について友だちに説明するよう依頼する。

③授業の振り返り

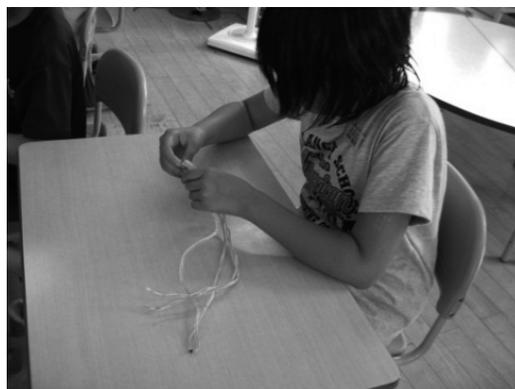
観点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。

友だちの様子を見て「今何をするのか」「どのようにするのか」が分かり、自分でもやってみようという意欲につながった。また、c児はe児の受け答えを聞いて、どのように答えるか、依頼するかを知り、自信をもって答えていた。このように、3人共同じ学習活動を設定したことで友だちがモデルとなり、見て分かる、聞いて分かるという状況が情緒の安定につながっていたと思われる。チャンスカードを引く順番を相談して決める場面では、それぞれ自分の意見を友だちに伝えることができ、友だちの意見を受け止めたうえで、どう折り合いをつけるか話し合いができた。しかし、d児は、c児とe児が話し合った意見に対して「どっちでもいい。」と答え、自分の思いを伝えることをあきらめてしまっていた。d児が「どっちでもいい。」と答えた理由を聞いて、その思いを汲み取ったうえで、友だちとつなげる授業者の援助が必要であった。

観点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。

分数の大きさと意味について実感を伴って理解させたいと考え、具体物を半分に分けるという操作的な活動を重視した。分けた結果が折り目をつけることで見て分かりやすく、分数のイメージがもちやすいと考え、モール（針金入りのひも）や画用紙を用いた。それらは、扱いが簡単であり、数直線や図として捉えやすいと考えた。しかし、c児は半分にすると「 $1/2$ 」になることはイメージできたようだが、半分の半分は「 $1/3$ 」、さらに半分に「 $1/6$ 」と予想した。折り目にテープを貼り、幾つ分になっているか調べさせたが、c児は不器用さがあるため、テープを貼る作業に苦戦し、授業者の援助が必要であった。また、幾つ分かを数える際にも正確に数えることができなかった。モールを半分に折るという活動だけでは、c児にとって分かる手立てにはなっていなかったと思われる。

写真1 モールを $1/8$ に折る活動



「本当に $1/3$ なのか」という確認から学習を進めるべきだった。実際にモールを切って元の大きさ「1」と比較して四つ分になっていることに気付かせ、 $1/3$ ではなかったことを確認すればよかった。元の大きさ「1」との関係を視覚的にフィードバックできる板書を工夫することも必要であった。

観点3 教科で学んだことを生活と結びつけて考えたり、使ったりする学習場面を設定する。

授業者は「 $1/8$ を作りなさい。」と指示したが、児童は何をしてよい分からない様子だった。「作る」という言葉から「分ける」という活動のイメージにはつながりにくかった。また、児童は紙皿、画用紙を「半分にして重ねる。」と言いながら折っていったが、折るという作業は「等しく分ける」という言葉のイメージとつながっていなかったと思われる。折りたたむことで、元の大きさ「1」を分けるというよりも、元の大きさ「1」が次第に小さくなることを視覚的に捉えさせてしまっていたように思う。単位分数の意味を理解させるためには、「分ける」という操作に絞って算数的活動を設定すべきであった。そして、「等しく分ける」「元の大きさは1」という概念の基盤となる言葉を使って意味づけする必要がある。

<実践No.5> 比べてみよう！どちらがお得？

①授業設定の思い

学んだことを生活とつなげることができる学習内容を考える(観点3)

5年生で学習する「単位量当たりの大きさ」について、実際の生活と結びつけて豊かにとらえてほしいと考えた。そこで、子どもたちの生活にとってかわりのある買い物の場面に焦点を当て、「単位量当たりの値段」を比べ「どちらが得か」を考えるという学習場面を設定した。

異学年で一緒に学習できる活動を考える(観点1)

3人で同じ学習活動を行い、学び合ったり協力し合ったりできる場を設定したいと考えた。6年生は「単位量当たりの値段」について学習していくが、4年生は品物1個分の値段を出す時に割り算を使うということを中心的な学習内容とした。いろいろな品物の1つ分の値段(単位量当たりの値段)を求める際に、品物やお金を分けるという共通の活動が設定できるのではないかと考えた。

“単位量で比べる”や“割り算”のイメージ化を図るための方法を考える(観点2)

「どちらが得かを考えるときには量を揃えて値段を比べる」「単位量当たりの値段(1つ分の値段)は割り算で求める」ということについて、イメージをもちやすいように、本物の品物やお金を使い「分ける」という操作活動を繰り返したり、分けたものを実際に見て確認したりすることを重要な学習活動として位置付けた。

②授業の概要

図6 授業の概要No.5

<題材名> 比べてみよう!どちらがお得?	
<算数科のねらい> 4年c児:1つ分の値段を求めるのには割り算を用いることがわかる。[数と計算] 6年d,e児:異なった量の2つのものの値段を比べるときには単位量当たりの値段で比べることに気付く。[量と測定] 単位量当たりの値段を求めるのには割り算を用いることが分かる。[量と測定]	
<自立活動のねらい> 4年c児:自分のすることがわかり課題をやり遂げることで、安定した気持ちで学習に取り組むことができる。[心理的な安定(1)] 3人で活動することをとおして、人とかわり合うことの楽しさを感じる。[人間関係の形成(1)] 6年d児:3人で活動する場面で、教師の声掛けにより友だちを手伝うことができる。[人間関係の形成(2)] 6年e児:3人で活動する場面で、状況を考えながら譲ったり手伝ったりすることができる。[人間関係の形成(2)]	
<展開>	
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 今日の学習内容を知る。 ◎同じジュースが(A)1個100円と(B)120円の場合はどちらがお得? 2 A,Bどちらがお得か考えよう。 (1)比べ方を考えよう。(それぞれで考える。) ◎ (A)3個で390円のりんごと(B)4個で440円のりんごでは、どちらがお得? ①自分なりのやり方で考える。 ②りんごやお金を分ける操作活動を行なう。 ③立式をする。 (2)他の問題でも考えてみよう。(3人一緒に考える。) ◎ (A)2Lで280円のお茶と(B)1Lで180円のお茶では、どちらがお得? ◎ (A)2kgで1000円の米と(B)5kgで2000円の米では、どちらがお得? ①単位量が何になるかを考える。 ②品物やお金を分ける操作活動を行う。 ③立式をする。 3 今日の学習を振り返る。 (1)どちらが「お得」かを比べるときには、量を揃えた値段で比べるとよいことを3つの問題を振り返り確認する。 (2)生活の中で単位量当たりの値段が使われている場合を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に興味もてるようにジュースの実物を提示したりA,Bの札を使いクイズ形式で答えるようにする。 ・「どちらがお得?」を掲示して学習課題を意識づける。 ・自分なりに考えられるように、問題が書かれている紙、りんごとお金を渡す。 ・考えることが難しいようであれば、「量を揃えて比べる」というキーワードを確認したり、分ける操作に結び付きやすいように区切りのある画用紙を渡したりする。 ・分けるという操作をさせることで、割り算と「分ける」ことを結び付けて考えられるようにする。 ・実物を見せることで量の違いを実感させ、そのままの値段では比べられないことを感じさせる。 ・協力して操作活動ができるような声掛けを行う。 ・分けるという操作をさせることで、割り算と「分ける」ことを結び付けて考えられるようにする。 ・板書を使い学習を振り返ることで、今日の学習内容を思い出しやすくする。 ・学習したことと生活をさらにつなげて考え、興味もてるようにする。

③授業の振り返り

観点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。

展開2では、お茶や米、お金を分けるという作業を3人で協力して行うことを期待してそのような場面を設定した。しかし、子どもたちは何をしてよいか分からず、結局は授業者が役割を指示して、それぞれがその作業を行うという活動となり、協力する姿はほとんど見られなかった。

場面の設定をただけでは子どもたちが主体的に活動することにはつながらない。やるべきことの全体像を提示して、どのようなことをどのような順番で行うかという見通しをもたせた上で、子どもたちに任せるような場の設定が必要であった。子どもがどのような思考をし、行動をするのかという具体的な姿を思い浮かべながら手立てを考慮していくことが大切だと感じた。

観点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。

6年生には「どちらが得か」を比べるときには単位量当たりの値段で比べることに気付いてほしいと思い、そのような学習内容を取り上げた。4年生のc児は何を考えてよいかかわからず、そこから授業に主体的に参加することができなくなった。また、6年生も活動が止まってしまう時間が長く続いた。4年生と一緒に学習することや、学んだことをつなげて考えることが難しいという6年生の実態からすると、今回の6年生の学習のねらいは、単位量当たりの値段(1つ分の値段)の求め方を理解するという事に絞るべきだった。「単位量当たりの値段(1つ分の値段)が安い方が得である」ということは、授業者が示した上で、りんご、お茶、米と様々な品物で単位量当たりの値段を求め、比べるという経験を繰り返す。そのことで、単位量当たりの値段が割り算で求められることを理解する。そして、授業者が単位量当たりで比べることの良さを知らせるというような授業展開にした方がよかったのではないかと感じた。児童に思考させることと授業者が提示することについて、児童の実態をふまえ、的確に判断していくことが必要であった。

また、4年生の取組の様子から、児童の実態を捉え、「できる・わかる」ための学習の手立てを用意しておくことと、安定した気持ちで授業に取り組めることの結びつきの強さを改めて感じた。

そのような展開の中でも、線を引いただけの「区切りのある画用紙(写真2)」を教材として用意したことは、りんごとお金を渡しただけでは何をどうしてよいか分からず活動が止まってしまっていたd児には有効であった。その画用紙を渡したことにより、りんごやお金を分けるというイメージをもつことができ、分けた結果としてA、Bそれぞれのりんご1個の値段が見て分かることで、どちらが得かを考えることができた。自分で考えることができたという満足感を得られたd児の様子から、「分ける」という言葉のイメージにつながる教材が思考の手掛かりとなる有効な物であることを改めて感じた。

写真2 「区切りのある画用紙」



観点3 教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。

「単位量当たりの大きさ」が生活の中で使われている場面として、将来の生活にも役立つという観点から買い物の場面を取り上げた。しかし、児童は買い物に行くことがあっても自分でお金を払う経験はほとんどしておらず、単位量当たりの値段が安いものが得であるという思いをもってはなかった。そのため、この題材を学習への意欲につなげていくことは難しかった。例えば、場面を“遠足のおやつを買う”とし、自分のこととして捉えられるようにするなど、子どもの側からその思いを考えた上で、題材や問題設定を考えていく必要があった。

<実践No.6> クイズグランプリ in ○○! “モノの位置を表してみんなで高得点!!”

①授業設定の思い

3人で一緒にできる活動を考える(観点1)

4年生の学習内容である「ものの位置の表し方」を学習内容の中心に据え、6年生の「対称な図形」という学習内容を加えることで、ねらいは個々に変えながらも、3人で一緒に取り組むことができる活動を設定した。

主体的に活動に取り組める教材・教具を考える(観点4)

子どもたちが主体的に課題に取り組めるように、個々に学習シートを挟んだファイルを用意した。このようにすることによって集団の中でも個の学びを大切にできると考えた。

安定した気持ちで楽しんで取り組める活動を考える(観点4)

楽しい雰囲気で行うように子どもたちが好きなクイズを取り入れた。クイズのやり方が分かったり意欲的に取り組めたりするように教材・教具を工夫していこうと考えた。

②授業の概要

図7 授業の概要No.6

<題材名> クイズグランプリ in ○○! “モノの位置を表してみんなで高得点!!”	
<算数科のねらい> 4年c児、6年d児：ものの位置の表し方について理解し説明することができる。[図形] 6年e児：ものの位置の表し方を説明し、線対称の位置を示すことができる。[図形]	
<自立活動のねらい> 4年c児：自分のすることが分かり、安心して学習に取り組むことができる。[心理的な安定(1)] 6年d児：困っている友だちにヒントを与えながら、協力して活動することができる。 [人間関係の形成(1)] 6年e児：困っている友だちがいることに気付き、その友だちにヒントを与えながら協力して活動することができる。 [人間関係の形成(1)(2)]	
<展開>	
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 今日の学習内容を知る。	・学習内容が分かるように、授業のねらいと流れを掲示する。
2 「クイズグランプリ in ○○」 みんなで協力してクイズに挑戦しながら問題に取り組む。 (1)クイズのやり方を知り、活動の見通しをもつ。 (2)クイズ形式で位置の表し方の問題に取り組む。	・ルールが分かるように掲示物を用いて説明する。 ・全員が正解することで得点できるルールとし、協力して取り組めるようにする。 ・一人ずつに問題シートを挟んだクリアファイルを用意することで、学習への意欲を高めたり、個別でじっくり考えたりできるようにする。 ・始めに練習問題を行うことで、学習課題について理解し、自信を持って取り組めるようにする。 ・個人で取り組んだことを全体で考えるときに分かりやすいように、個人のプリントと同じ掲示物を用意する。 ・50点の問題は、児童の実態に応じた問題とすることでそれぞれの学習のねらいが達成できるようにする。
3 みんなで得点を計算する。	・達成感を味わえるように、くす玉を準備し3人で割る活動を取り入れる。
4 今日の学習を振り返る。 (1)ものの位置の表し方と線対称について確認する。 (2)生活の中で「ものの位置の表し方」が使われている場面を知る。	・学習したことと生活をさらにつなげて考え、興味をもてるようにする。

③授業の振り返り

観点1 (小集団の中で)人を意識したりやり取りしたりできる場を設定する。

友だちと一緒に取り組むことができる活動(クイズ)を設定したことで、友だち同士で教え合う姿が見られた。授業者が出題した言葉の意味をd児、e児がc児に分かりやすく説明したり、c児もそれを受け入れたりする姿が見られた。このように、d児、e児にとっては、既習の学習内容であったため、c児に教えるという場面が生まれた。

このことがd児、e児の自己有用感につながったのではないかと思われる。

写真3 6年生が4年生に教える姿



観点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。

課題の提示については、起点を変えた課題を提示した際、d児は誤って前回同様の起点からものの位置を表そうとした。そのため授業者は起点を指し示してしまった。しかし、子どもが自ら起点を指し示したり目印を貼ったりするなど、子ども自身が確認することが必要であった。

このように、学習のポイントとなる内容については、子どもが考え、表現することができるような授業者の関わり方が大切であったと気付いた。

観点3 教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。

授業の最後には、数日後にある発表会の会場の写真や座席表を示し、そのことが「ものの位置の表し方」と関連があることを紹介した。子どもたちは興味をもって話を聞いていた。学んだことが身近な生活の場面とつながっていることに気付くことができたのではないかと考える。

観点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

クイズを取り入れ、問題が書かれた紙を出し入れするボードや正解したときは音が鳴るものなどを準備したことで、子どもたちの興味を引くことができ、学習意欲をより高めていくことができた。また、個別に課題に取り組めるための教材として、開くと地図や問題シートが一度に見られるようなファイルを用意した。自分の手元にファイルがあることで「自分だけの物」という喜びにつながり、意欲的に学習に取り組もうとする姿が見られた。個人のファイルがあることで、自分で考えようとする意識をもって取り組み続けることができた。

友だちに教えたり一生懸命考えたりしている姿をその場で具体的に称賛することで、子どもたちの意欲を高めることができた。また、授業者が児童の言葉を丁寧に拾い、児童に返していくことで、安心した気持ちで授業に取り組むことができた。

みんなで協力してクイズに挑戦することにしたため、人と競争するのではなく、勝敗を意識しないでいられたことも安心につながったと思われる。

(3) 授業実践から「授業づくりの工夫」を考える

6つの授業実践の振り返りをもとに、4つの観点をより具体的な「授業づくりの工夫」として提案していくこととした。

大切にしたい4つの観点に基づいた授業を行うためには、どのような指導・支援が必要になるのかをまとめながら、それらを自立活動の内容(表6)と関連付けながら考えていった。

表6 自立活動の内容

1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関する事 (2)病気の状態の理解と生活管理に関する事 (3)身体各部の状態の理解と養護に関する事 (4)健康状態の維持・改善に関する事	(1)情緒の安定に関する事 (2)状況の理解と変化への対応に関する事 (3)障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関する事	(1)他者とのかかわりの基礎に関する事 (2)他者の意図や感情の理解に関する事 (3)自己の理解と行動の調整に関する事 (4)集団への参加の基礎に関する事	(1)保有する感覚の活用に関する事 (2)感覚や認知の特性への対応に関する事 (3)感覚の補助及び代行手段の活用に関する事 (4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関する事 (5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する事	(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関する事 (2)姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関する事 (3)日常生活に必要な基本動作に関する事 (4)身体の移動能力に関する事 (5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関する事	(1)コミュニケーションの基礎的能力に関する事 (2)言語の受容と表出に関する事 (3)言語の形成と活用に関する事 (4)コミュニケーション手段の選択と活用に関する事 (5)状況に応じたコミュニケーションに関する事

「特別支援学校指導要領解説自立活動編」より

観点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。

私たちは、クイズやゲームを取り入れたり、工作や作業など子どもの好きな活動を取り入れて、一緒にできる学習活動を設定した。そのことにより友だちの様子を見て何をすることが分かり、安心して自分もやってみようと活動に取り組む姿や、友だちと同じ活動をすることで、ものを介して友だちとつながったりする場面が見られた。しかし、私たちが期待していたような友だち同士で教え合ったり、協力したりする場面はほとんど見られなかった。一緒に活動できる場を設定し、興味のある活動を取り入れるだけでは、友だちと関わり合う姿へはつながりにくかった。場を設定したうえで、教師が子どもの意図と意図をつないだり、子どもの気持ちや思いを代弁したり、子どもの言葉をより具体化したりしながら、子どもと子どもをつなげていく支援が必要であることが分かった。

授業づくりにおいても、まずは担任との信頼関係が基盤となる。そして、担任が子どもと子どもをつなぐ支援をすることで、子どもたちは友だちの気持ちや思いを知ったり、友だちの意図を意識して関わったりすることができるようになる。このことは、自立活動の項目「他者とのかかわりの基礎に関する事」「他者の意図や感情の理解に関する事」等と関連している。

観点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。

私たちは、「できる・わかる」手立てとして、実際に見たり、操作したりできる教材・教具や、文字や写真などの視覚的な手掛かりを準備した。しかし、授業者の発問の意味が分からず戸惑ったり、設定したねらいが高すぎて学習活動へのモチベーションが低くなってしまったりする子どもの姿が見られた。それは、児童の実態を捉えきれておらず、授業者の設定したねらいや支援がずれていたためである。実態に応じて学習目標や学習内容をスモールステップで組み、ねらいを焦点化しておく必要があった。そして、学習に向かうモチベーションを維持し、主体的に学習に取り組むためには、小さな「できる・わかる」を積み上げていくことが大切だということも分かった。そのような子どもの姿から、実態把握に基づいたねらいの焦点化が授業づくりの根幹であることも確認できた。

また、視覚的な情報や操作活動と共に、子どもが見たこと、操作したことなどを繰り返し言葉で意味づけ、それらを的確な言葉、核となる言葉と結びつけていく教師の支援が重要であることも分かった。

このように、自閉症のある子どもの認知の特性に応じて、視覚的な手掛かりや操作的な活動をとおして「できる・わかる」体験を積み重ねることは、自分の得意な面を活かして苦手なところを補ったり、援助依頼をしたりする姿につながっていくのではないかと考える。このことは、自立活動の「感覚や認知の特性への対応に関すること」「自己の理解と行動の調整に関すること」等と関連している。

観点3 教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。

私たちは、「生活とつなげる」ということを、子どもたちが生活の中で体験していることを取り入れたり、学習したことと生活をつなげて題材を設定したり、実際に生活の中で使われている場面を紹介したりすることだと捉えていた。しかし、授業実践での子どもの姿から、概念形成の基盤となる操作的な活動を積み上げたり、広げたりする算数的活動も必要であることが分かった。

自閉症のある子どもたちは、興味・関心が限定されるという特性から数量概念の基盤となる生活経験そのものが少ないということが考えられる。また、経験はしていても、それらを言葉で意味づけたり、他の経験と結びつけて捉えたりすることが難しいという特性もある。だからこそ、教師が体験と体験をつなげたり、学んだことを生活とつなげたりしていくという意識をもつことが重要だと考える。さらに、校外学習で学習したことを実際に使ったり、交流及び共同学習の場で学習したことを発表したりするなど、教科で学んだことを広げたり深めたりする機会を設定することで、より確かな学びとなると考える。このことは、自立活動「認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること」等と関連している。

観点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。

私たちは、見通しをもって安心して取り組めるように、導入時にスケジュールや興味・関心を引きそうな具体物を提示した。学習のイメージがもてる視覚情報、「見たことがある」「使ったことがある」という具体物があることで、子どもたちは安心感を得て、学習へ向かい始めることができた。しかし、途中から学習へのモチベーションが下がり、学習課題に向かうことができなくなった子どももいた。授業者に認めてもらいたい、分かってもらいたいという子どもの内面を受け止めるかかわりができていなかったからである。授業では、環境としての教師のかかわりが子どもの情緒の安定の基盤となることも改めて確認できた。これまでのうまくいかなかった経験が多い子どもは、自信がなかったり、不安だったり、自己肯定感が低くなったりしている。だからこそ、教師は意識して子どもの気持ちや思いを受け止め、「そうだね」「なるほど」「すばらしい」といった肯定的な言葉かけをしていかなければならないと思った。

不安につながる環境的な要因を明らかにして、安心できる人、安心できる場所、安心できる物、安心できる活動など、子どもが安定した情緒の下で学習ができるように環境を整えていくことが大切だと考える。これは、自立活動「情緒の安定に関すること」等と関連している。

これらの考えを基に具体的な指導・支援を整理し、自立活動の内容との関連を示したものが次の表である。

表7 自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくり（算数科）の工夫

授業づくりで大切にしたい観点と授業づくりの工夫		関連する自立活動の区分と項目番号 (P18表6参照)
観点1 (小集団の中で) 人を意識したりやりとりしたりできる場を設定する。		
a. 学習活動	一緒に活動できる場の設定	3人間関係の形成(1)(2)(3)(4)
	好きなことや興味のある活動	2心理的な安定(1)
b. 教師の役割	児童の言葉や気持ちを分かりやすく代弁	3人間関係の形成(2) 6コミュニケーション(1)(2)(3)
	かかわりを促す言葉かけ	6コミュニケーション(1)(2)(5)
観点2 児童が自分に合った学習方法で考えて「できる・わかる」手立てを学習場面で用意する。		<u>2心理的な安定(1)</u> <u>3人間関係の形成(3)</u> <u>4環境の把握(2)</u>
a. 目標設定	ねらいの焦点化	
b. 教材・教具	実際に体験することとおして確認でき言葉のイメージにつなげることができる教材・教具	2心理的な安定(3)
c. 発問・指示	分かる言葉で具体的に発問・指示	6コミュニケーション(2)
	言葉に合わせ視覚的な物の提示	
d. 板書	学習したことが見て確認できる板書	
e. 意味づけ・言語化	体験したことを丁寧に言葉で意味づけ	4環境の把握(5) ↓
観点3 教科で学んだことを生活とつなげて考えたり使ったりする学習場面を設定する。		<u>4環境の把握(2)(5)</u>
a. 題材設定	算数で学習したことが生活の中で使われている場を題材として設定	
	算数の基礎的な概念(分数とは何か、面積とは何か等)を題材として繰り返し設定	
b. 展開	学習したことが生活の中で使われている場を紹介	↓
観点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調整の手立てを考える。		<u>2心理的な安定(1)</u>
a. 導入	学ぶ先が見て分かるように導入で予定を提示	4環境の把握(2)
	興味・関心を引きそうな具体物を提示	
b. 教室環境	座席の配置や掲示物への配慮、整理整頓を心がけるなど刺激量の調整	
	場の構造化	
c. 応答や称賛の言葉かけ	行動の奥にある思いを受け止めながらのかかわり	3人間関係の形成(1)(2)(3)
	よかった行動や取り組んでいる姿を、その場で具体的に称賛	2心理的な安定(3)
d. 教材・教具	意欲につながる教材・教具	↓

今回提案する「授業づくりの工夫」は、あくまでも2つの研究協力校での授業実践から考えたものである。どの項目を選択するか、どの項目から取り入れるか、どの項目を重点的に取り入れ

るか、また、新たな「授業づくりの工夫」が加わるのかについては、児童の実態によって異なってくると思われる。

表7から分かるように、「授業づくりの工夫」は全て自立活動の内容と関連している。「特別支援学校学習指導要領解説自立活動編」に「自立活動は、授業時間を特設して行う自立活動の時間における指導を中心とし、各教科等の指導においても、自立活動の指導と密接な関連を図って行わなければならない。このように、自立活動は、障害のある幼児児童生徒の教育において、教育課程上重要な位置を占めていると言える。」と記載されているように、授業実践を行った算数科の指導においても、自立活動の視点を取り入れることが大切であることが確認できた。

また、「自立活動の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の障害の状態や発達段階等の的確な把握に基づき、指導の目標及び指導内容を明らかにし、個別の指導計画を作成するものとする。その際、内容の中からそれぞれに必要とする項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的に指導内容を設定する。」と記載されているように、「授業づくりの工夫」も、それぞれの項目が相互に関連し合っていることを確認することができた。

(4) 授業実践から見えてきたこと

授業の振り返りでは、「なぜうまくいかなかったのか」「どうすればよかったのか」という視点で何度も授業のビデオを見直した。子どものつぶやきや視線、表情、動作、また、授業者の声、位置、動きなど、授業をしているときには見えていなかったこと、意識していなかったことに気付くことができた。改めて、子どもに学ぶ、子どもと共に学ぶという教師の姿勢が基盤であり、子どもから出発して授業をつくっていくことが大切だということが分かった。この教師の姿勢が基盤となって、子ども主体の授業が展開されていくと考える。

「特別支援学校学習指導要領解説自立活動編」には、「ICF（国際生活機能分類）の特徴の一つは、環境因子等を適切に考慮する点にあるが、成長期にある幼児児童生徒の実態は様々に変化するので、それらを見極めながら環境を構成したり整えたりする必要がある。」と記載されている。「できた・できない」という姿だけでなく、環境【人・もの・こと】の中で子どもの状況を把握することが重要であることが分かった。特に、環境としての教師のかかわりが子どもの情緒の安定や思考にどのように影響していたか、ビデオを見て振り返ることも大切なことである。子どもの内面を捉えて関わることができているかを、謙虚に厳しく振り返ることが大切であり、それが子どもから学ぶということなのである。

そして、授業づくりの基盤は、当然のことながら担任と子どもとの関係性である。このことは自立活動の「3人間関係の形成（1）他者とのかかわりの基礎に関すること」と関連している。そして「特別支援学校学習指導要領解説自立活動編」にも「教師との安定した関係を形成することが大切である」という例が示してある。私たちが授業をして「うまくいかなかった」要因の一つは、授業者と子どもとの信頼関係という授業づくりの基盤にあった。授業実践をとおして、子どものその気持ちを受け止め、支えてくれる担任の存在がいかに重要であるかを再認識した。

私たちは、複数在籍学級の子どもたちが少人数集団で学ぶ良さを生かすという観点で、6つの授業実践をしてきた。その中で、最も効果的と思われるのは、一人の児童またはある学年の指導内容を中心として、同じ学習活動を設定し、個々のねらいを立てることであった。

学校生活の大半を占めるのは授業である。だからこそ、教師が社会性を育む、生活の力を育むという意識をもって教科の指導を行っていくことが重要であると考えます。

3 「授業実践ファイル」の実際

授業実践ファイルでは、自閉症・情緒障がい特別支援学級の障がいの特性に応じた授業づくりの工夫について、私たちが行った授業実践をとおして紹介することとした。

6つの授業実践それぞれについて、「自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりの工夫」(P20表7)から授業を振り返り、授業者が自分の授業で紹介したい工夫を考え、授業事例としてまとめていった。

作成に当たっては、「授業で大切にしたいこと」や「授業づくりの工夫」がどのようなことかイメージできるように、伝え方の工夫を考えていった。

(1) 全体構成

以下に授業実践ファイルの全体構成を示す。

	項 目	内 容
1	授業実践ファイル作成にあたって	作成の目的や方法、活用の仕方
2	授業づくりの工夫	P20表7「自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりの工夫」
3	実践事例の見方	実践事例の全体構成や内容、見てほしいポイント
4	実践例No.1～No.6	授業実践の紹介

(2) 実践例の全体構成と伝え方の工夫

① 全体構成

以下に実践例の全体構成を示す。

	項 目	概 要
1	題材名	題材を記した。
2	授業設定の思い	4つの観点をふまえ、何を大切にしながら授業を構想していったかを述べている。
3	ねらい	算数科と自立活動のねらいを述べている。
4	展開	「学習活動」と「児童の受け止め」と「教師の支援」について述べている。
5	授業づくりの工夫 (4つの観点ごとの評価から)	授業づくりの工夫について、有効な支援であったと思われることと、改善していく必要があると感じたことを、「自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業づくりの工夫」(P20表7)と関連させて述べている。
6	コラム	授業者が授業実践をとおして感じたことや、担任とのやりとりの中で心に残ったことを述べている。

②伝え方の工夫

実践例の実際

対象児童の実態に応じて、授業を構想する際に大切にしたいポイントを四角囲みにして示した。
また授業者が最も大切にしたいと考えたことを一番目に示した。

子どもの実態に応じた的確な支援をするためには、子どもの具体的な姿を思い浮かべながら授業を考えることが大切であることが分かるようにこの欄を設けた。

有効な支援であったと思われることと、支援を改善していく必要があったと思われるものを顔の表情で表記し分かりやすくした。

場面が展開のどこにあたるか分かるように※を表記した。

表7（P20）の中のどの工夫かが分かるように吹き出しに項目を記した。

授業場面をイメージしやすいように実際のやりとりや、教材・教具等を示し、具体的に説明している。

<実践例5>

1 題材名 比べてみよう！どちらがお得？

2 授業設定の思い

学んだことを生活とつなげることができる学習内容を考え・・・

5年生で学習する「単位量当たりの大きさ」について、実際の生活と結びつけて豊かにとらえて・・・

異学年で一緒に学習できる活動を考える（観点1）

6年生2名、4年生1名が在籍する学級で、3人で同・・・

3 ねらい

（算数科）

4年c児：1つ分の値段を求めるには割り算を用いることが分かる。[数と計算]

（自立活動）

4年c児：自分のすることが分かり課題をやり遂げることで、

4 展開

学習活動	児童の受け止め
1 今日の学習内容を知る。 同じジュースが（A）1個100円と（B）1個200円の場合、どちらがお得？	・今日の勉強はおもしろい ・「どちらがお得か」を

※1

5 授業づくりの工夫（4つの観点ごとの評価から）

観点4 安定した気持ちで学習に取り組めるように環境調

※1

a. 導入
興味・関心を引きそうな具体物の提示

展開1でA、Bの札を配り、ジュースを見せながらクイズ形式学習内容を提示した。

<実際の場面>

（A、Bの札をそれぞれに配り、カバンからジュースを取り出す）

A児：「O×クイズ！」（笑顔）

「オレンジジュース！」

このように作成した授業実践ファイルを「小学校自閉症・情緒障がい特別支援学級算数科授業実践ファイル～子どもから学ぶ授業づくりのヒント～」として、島根県教育センターHPに掲載し、紹介することとした。

4 「授業づくりリーフレット」の実際

(1) 基本的な考え方

作成にあたっては、私たちが授業実践をとおして感じた様々なことや本教育センターの事業等から日頃感じている事をもとに伝えていきたい内容を考えていった。その際、他の機関で作成されているリーフレットや県内の特別支援教育担当指導主事の意見を参考にしていくこととした。

基本的な考え方としては、私たちが授業実践を行った自閉症・情緒障がい特別支援学級だけでなく他の特別支援学級の授業づくりの参考にもなるものとする。また、「授業づくりはこのようにすればよい」という手法を示すものではなく、私たちが提案したことを参考に、各々の担任が目の前の子どもたちの授業づくりについて『考えて』もらえるような視点や方向性を示すものとする。あわせて、特別支援学級が設置されている意義や特別支援学級と通常の学級における教育課程の違い等基本的なことについても取り上げる。基本的なことをおさえつつも「特別な支援とは？」「実態把握とは？」と改めて考えてもらい、これまでの『意識や見方を変える』ということにつながるようにしていきたい。特別支援学級担任一人一人が、主体的に考えて読み進めていけるように、リーフレットの伝え方を工夫していくこととする。

(2) 内容と伝え方の工夫

①コンセプト

『考えること』『意識や見方を変えること』

②全体の構成

ア：表紙

イ： **その1** 特別支援学級で学ぶことの意味について『考える』

ウ： **その2** 特別支援学級の授業づくりのポイントについて『考える』

エ： **その3** 障がいの特性に応じた授業づくりの工夫について『考える』

オ： **その4** 教師の役割について『考える』

③各ページで伝えたい内容とその工夫

ア：表紙

ここでは、一緒に『考える』という姿勢を伝えていきたいと考えた。

まず、特別支援学級担任の日頃の悩みや戸惑いを吹き出して紹介し、共感する姿勢を届けることからスタートした。

そして、特別支援学級担任に自分と目の前の子どもとの関係を見つめ直し、自分のこととして読み進めてもらうために、それぞれのページで伝えたい内容をクイズ形式にして示した。

イ： **その1** 特別支援学級で学ぶことの意味について『考える』

このページでは、特別支援学級においては、障がいの特性に応じて指導していくことが必要であるということを伝えていきたいと考えた。当たり前だと思われるそのことについて再確認してもらうために、日

写真4

「やってみよう！特別支援学級の授業づくり」リーフレット



頃よく聞く「個別に丁寧に」「子どものペースにあわせて」等の言葉を会話形式で取り上げて、その意味を考えてもらうこととした。

また、特別支援学級担任経験が短い教員が多い状況から、障がいの特性に応じた指導の工夫が行える「特別の教育課程」にもふれることとした。

そして、特別支援学級担任経験者から聞き取った言葉を「先輩教師の言葉」としてコーナーを設け、特別支援学級の魅力についても伝えることで、日頃の取組を振り返って考え、共感したり、新たな気付きをもったりしてほしいと考えた。

ウ： **その2** 特別支援学級の授業づくりのポイントについて『考える』

このページでは、特別支援学級での授業づくりについて、まず、子どもの姿を環境とセットで見えていくR（リサーチ）が大切であることを伝えたいと考えた。「子どもの姿を環境とセットで見えていく」という意味が伝わりやすいように、具体例を示すことにした。

そして、子どもの周りに存在する全ての人・もの・ことを環境として捉え、環境をキーワードにしてR→P→D→C→Aのサイクルで授業に取り組むことが、子ども理解や具体的な支援の手掛かりを増やしていくことにつながることを提案した。

エ： **その3** 障がいの特性に応じた授業づくりの工夫について『考える』

自閉症・情緒障がい特別支援学級での授業実践をとおして、私たちが考えた障がいの特性に応じた授業づくりの工夫と授業づくりの基盤（教師との信頼関係や子ども理解）について伝えたいと考え、イメージ図として表した。授業の工夫について具体的にイメージしてもらえるように写真を提示しながら紹介した。

また、イメージ図の中に、関連する自立活動の区分を表記することで、障がいの特性に応じた教科の指導では、自立活動の視点を取り入れていくことが大切であるということも伝えることとした。

研究紀要や授業実践例も特別支援学級担任に参考にしてもらえるように、それらが島根県教育センターHPに掲載してあることを紹介した。

オ： **その4** 教師の役割について『考える』

このページでは、子どもを変えるのではなく、環境としての教師のかかわりや支援をより深く考えていくことが、子どもたちのよりよい育ちにつながっていくことをイメージ図として示した。文字だけで伝えるのではなく、絵で表現することで、教師一人一人が、適切な環境について考えることにつながってもらいたい。

最後には、このリーフレットを読み終えた特別支援学級担任に、悩みや不安を一人で抱え込まないで、できることからやってみようと思ってもらいたいと考えて、『つながろう』『やってみよう』という応援メッセージを送ることとした。

このようにして作成したリーフレットを「やってみよう！特別支援学級の授業づくり」というタイトルにし、県内小・中学校及び特別支援学級担任へ配布していくこととした。

5 今年度のまとめ

今年度は、「小学校自閉症・情緒障がい特別支援学級算数科授業実践ファイル～子どもから学ぶ授業づくりのヒント～」と『『やってみよう！特別支援学級の授業づくり』リーフレット』という二つの成果物を作成した。

私たちが授業者となって授業実践をしたことで、特別支援学級における授業づくりの難しさを実感することができた。一人一人が考えたことや感じたことを整理し、特別支援学級の授業づくりで大切にしたいことについて、以下のようなことを再確認することができた。

まずは、特別支援学級で授業を行うということは、教科の指導であっても、自立活動の視点を取り入れることが必要である。自立活動の時間の指導だけでなく学校で過ごす全ての時間において、その視点は大切であり、重要である。通常の学級の教育内容をただ単に個別に指導していくのではなく、常に自立活動の視点を意識していくことが、学びにくさのある子どもたちの教育には必要であり、重要であることを再確認した。

次に、担任との人間関係が全ての基盤にあるということである。当たり前のことではあったが、そのことの重要性を今回の研究をとおしてさらに実感した。将来の自立や社会参加に向けて、学校で子どもたちの社会性を育むには、最も身近な担任の役割が重要である。特別支援学級は在籍人数が少人数であるが故に、その影響力は大きい。信頼できる大人との関係性があるからこそ、様々な学びが積み上がっていくと考える。

さらに、特別支援学級では、周りの環境を整えていくことがとても重要だということである。具体的な支援を考えるためには、環境と子どもを結び付けて捉えることが大切だということが分かった。そのような捉え方での子どもの情報を増やしていくことで支援の手掛かりが増え、子どもたちの学びやすさにつながっていく。特別支援学級の授業を考えていく際には、このような視点を大切にしていかなければならないことを再確認した。

授業実践での子どもたちの姿から、このように多くのことを学ぶことができた。様々な学びを多くの特別支援学級担任に伝えていくことが、特別支援学級の指導の充実につながり、子どもたちの学びの充実にもつながっていくと考える。

V 成果物の活用

作成した2つの成果物を今後様々な場面で活用していきたい。

リーフレットは県内の小・中学校、特別支援学校、市町村教育委員会、教育事務所に配布する。また、島根県教育センターのHPにリーフレットと、授業実践ファイルを公開し、ダウンロードできるようにする。このようにすることで、多くの人に活用しやすい状況を作ることとした。

県内のすべての小・中学校にこのリーフレットを配布することで、特別支援学級の担任だけではなく、管理職や通常の学級担任もそのリーフレットを見る機会ができ、特別支援学級に在籍する子どもたちの理解につながる。そのことが、全校体制で特別支援学級の子どもや特別支援学級担任を支えようとする意識につながるのではないかと考える。

さらに、島根県教育センターでの研修や出前講座等で、これらの成果物を積極的に活用していきたい。特に、新任特別支援学級担当教員への研修では、そのリーフレットを使って、担任一人一人が『考える』こと、『意識や見方を変えること』につながるように活用していきたい。

研修後のアンケートを活用して、リーフレットの活用状況等についても確認していきたい。

VI おわりに

「特殊教育」から「特別支援教育」という時代の流れの中で、通常の学級における特別支援教育は、子どもたち一人一人のニーズに応じた支援の充実とともに近年ではユニバーサルデザインという考え方が広まり、どの子にも有効な支援を目指して日々取組が進んでいる。

そのような特別支援教育の進展は、特別支援学級にどのような影響を与えてきたのだろうか。それまでの「特殊教育」の時代と比較して、特別支援学級で学ぶ子どもたちの一人一人のニーズを大切に、子どもたちの自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援することにつながってきたのだろうか。特別支援教育がスタートして7年経った今、もう一度、特別支援学級が存在している意義、そこでの子どもたちの学びの姿がどのようなものであるべきかということが、整理し直されていく必要があるのではないかと考える。

そして、この3年間の私たちの研究は、まさにそのような特別支援学級の意義について改めて考えてみる機会となった。

通常の学級の中で特別支援教育の考え方が普及してくるにつれ、特別支援学級の児童生徒数が増加してきている。そのことは、共生社会に向けた特別支援教育の取組が進み、通常の学級と特別支援学級の垣根が低くなっているとも言えるのかもしれない。しかし、それは、通常の学級と特別支援学級での学びの質に違いがなくなり、特別支援学級が単なる少人数で学ぶ場となっていく危険性を含んでいるとも言える。そのようなことにならないように、障がいの特性に応じた指導の工夫とはどのようなものなのかということを、授業者は絶えず考えていく必要がある。

この3年間の研究で私たちが辿り着いた障がいの特性に応じた指導の工夫とは、自立活動の視点を取り入れた授業づくりであった。子どもたちの自立と社会参加に向けての主体的な取組を支援したり、子どもたちの持てる力を高めたりという特別支援教育の視点に立って考えた時、教師ができる支援は学びの環境を整えることである。そして、そのような支援のためには自立活動の視点が必要なのである。優れた指導者は、そのことを意識する意識しないにかかわらず、自ずとそのようなかかわりや支援を行っているということを、この3年間で出会った多くの特別支援学級担任から学んだ。また、その自立活動の視点と共に、「特殊教育」の時代から知的障がい特別支援学級等で取り組まれてきた生活に生かせるような力を総合的に育む学習の意義を今一度捉え直し、継承していくことも必要だと考える。

特別支援教育の流れは、インクルーシブ教育システムの構築という特別支援教育の推進に向かってまた一つ大きな転換期を迎える時代となってきている。そのような時代の中で、特別支援学級という学びの場にどのような意義があるかということを実践に基づいて提案できるように、特別支援学級での学びをさらに充実させていく必要がある。そして、そのために教育センターができる特別支援学級担任へのさらなる支援を考え、これからも一緒に取り組んでいきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご協力いただいた研究協力校をはじめ多くのみなさまに心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

なお、この研究は、教育相談スタッフ特別支援教育セクションの青砥玉枝、中村明子、大森加代子、長谷川宏基、岩田信子の共同で行った。

(平成 23、24 年度共同研究者 藤原優子、吉野晃子、宮前博文、中島克久、横山圭司)

【引用文献】

- ・「特別支援学校学習指導要領解説総則等編」（幼稚部・小学部・中学部）文部科学省（平成 21 年 6 月）
- ・「特別支援学校学習指導要領解説自立活動編」（幼稚部・小学部・中学部・高等部）
文部科学省（平成 21 年 6 月）

【参考文献】

- ・「研究報告書第 81 号 特別支援学級における授業の実際—特別支援学級スタート応援ブックの作成—」
平成 23・24 年度 茨城県教育センター（平成 25 年 3 月）
- ・静岡県総合教育センターHP 「特別支援学校の授業づくり」に関する資料（平成 23 年 4 月）
- ・「小学校学習指導要領解説算数編」 文部科学省（平成 20 年 8 月）
- ・「新しい教育課程と学習活動 Q & A 特別支援教育【知的障害教育】」
全国特別支援学校知的障害教育校長会編 東洋館出版社（2010）
- ・「特別支援教育ハンドブック」 島根県教育委員会（平成 23 年 3 月）
- ・「特別支援学校 特別支援学級担任ガイドブック」佐藤慎二著 東洋館出版社（平成 25 年 2 月）